

インクルーシブ授業の視点でみるイタリアの中学校音楽科教科書

—*fantasia e musica* (2017) の内容を中心に—

大野内 愛

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

**Italian Junior High School Music Textbook from an Inclusive Teaching Perspective:
Fantasia e Musica (2017), with a Focus on its Content**

Ai OONOUCHI

Abstract

This study analyzes and discusses an Italian junior high school music textbook from the viewpoint of classes, to realize inclusive education and capture its characteristics, as Italy is one of the best countries for inclusive education. In Japan, a universal design has been used to create classes, but the challenge is that the purpose of the design is to assimilate into regular education. Inclusive classes require educational practices to empower all students as they learn with diverse peers. In schooling, empowerment is understood as “the process of becoming aware of, controlling, nurturing, and maximizing one’s inner capacities by being given ownership based on intrinsic motivation.” The analysis of an Italian textbook revealed three characteristics: first, textbooks are planned from the perspective of universal design; second, students have a wide range of choices; and third, it is possible to develop lessons according to students’ interests. Compared to Japanese textbooks, which are short and focus on the content to be learned, Italian textbooks are quite lengthy. However, there is a wide variety of learning styles and content options to suit students’ interests. The idea that students should be in charge of their learning and that there is a variety of students in the classroom is important for having an inclusive classroom.

1. 研究の背景と目的

21 世紀に入り、日本のインクルーシブ教育については、その在り方が様々な方面から議論されてきた。文部科学省（2012）は共生社会の実現に向けて、障がいのあるものとないものが共に学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育システムの構築が重要であると示し、それを受けて、ユニバーサルデザインのように、特別なニーズをもつ子どもへの支援はすべての子どもにとって有効となる、といった視点での指導方法の提案がなされてきた。

インクルーシブ教育を目指した授業（以下、「インクルーシブ授業」）に関する先行研究は、小学校を対象としたものは多く見られるが、中学校を対象としたものは比較的少ない¹⁾。その理由は「中学校では、高校入試や教科担任制の影響を受けた学力の育成が土台にあること」、「中学校は生活で生きて働く力の育成よりも、社会で生きて働く力の育成が中心となりがちで、競争原理主義や成果主義に偏っていること」（永田 2018, pp.132-133）とされている。生活で生きて働く力、社会で生きて働く力はどちらも重要だが、社会で生きて働く力は、つまり、高校入試を経由する競争社会を生き抜く力と捉えられがちであり、中学校での授業が競争原理主義や成果主義に偏った結果、高校入試のための学力保障の視点から、特別なニーズのある生徒が排除される傾向にある（今井 2018, p.84）。

そうした中で、ユニバーサルデザインの授業づくりが推進される動きもあるが、これは「誰もができる、

わかりやすい授業」を目指したもので、「できない」を「できる」ようにさせる支援の方法である。抽象度の高い学びへ深化拡充していく中学校の授業では、焦点化・視覚化・共有化するユニバーサルデザインの手法は有効である一方、教材や授業内容へのアクセシビリティばかりに目を向けると、結果的には通常教育に、特別なニーズをもつ子どもが追いつくための授業になる恐れがあることを、永田 (2016, pp.181-183) は指摘している。

ユニバーサルデザインの授業に対し、インクルーシブ授業とは、特別なニーズをもつ子どもたちに、通常の学習集団への同化を求めるのではなく、「多様性・差異のある子どもたちが共同して学びに値する集団を当事者の目線からつくること」(湯浅 2015, p.5)、つまり『通常』の子どもたちにとっても、特別な存在の参入によって、これまであたりまえに過ごしてきた学びと生活の場はどのような空間なのか、自分たちにとってニーズとは何か、またそれはどのようにして満たすことができるのかを問い返す機会にならなければならない」(湯浅 2005, pp.111-112) とされている。また湯浅 (2018, p.31) は、特別なニーズをもつ生徒ばかりでなく、「健常児」と言われる生徒も、ときに競争原理主義や成果主義に偏った授業の中で、パワースタートに追い込まれることもあると指摘しており、こうした生徒たちをもエンパワーし、再包摂することがインクルーシブ教育に必要な視点なのである。

さて、エンパワーすること、つまりエンパワメント²⁾ (empowerment) とは「権利や権限を与えること」という意味をもつ法律用語として17世紀に使われ始め、現在では社会福祉、医療と看護、教育、ジェンダーなど、様々な分野で用いられている。各分野に共通するのは、社会的に差別や搾取を受けたり、組織の中で自らコントロールしていく力を奪われたりした人々が、そのコントロールを取り戻すプロセスを「エンパワメント」という言葉で表そうとしていることである(久木田・渡辺 1998, pp.5-6)。とりわけ学校教育の文脈においては、エンゲージメント(夢中で取り組むこと)の先にあるものとして「エンパワメント」を捉え(スペンサー&ジュリアーニ 2020, p.3)、「内発的動機づけにもとづいたオーナーシップを与えられることにより、自らの内なる能力に気づき、それを制御し、育て、最大限にまで引き出すプロセス」などという意味として理解される傾向にある³⁾。エンパワメントに関して、永田 (2018, p.141) は「できない」自己を自身や他者とともに認識するプロセスすらもエンパワメントになるとし、「できる」「できない」にまつわる自身や他者の多様な感情や、価値観の認識を含み込んだ、多様な「自己」を学力形成の軸にすることが重要であると主張している。

以上のことから、インクルーシブ授業においては、多様な生徒を包摂するだけでなく、すべての生徒にとって教育実践がエンパワメントとなる必要があるといえる。本稿では永田 (2018) にしたがって、インクルーシブ授業を「自らのエンパワメントにつながる生活・社会で生きて働く力の育成を目指し、生徒の多様性に対応し、学習者の包摂や再包摂を目指す柔軟な授業」と定義する。

さて、日本においてこうしたインクルーシブ授業の実現を困難にしているのは、前述のとおり、通常学級への同化という根強い意識である。そこでインクルーシブ教育を実現している最たる国といわれるイタリアに目を向けたい。イタリアは、特別な支援を要する生徒の99.6%が通常学級に在籍しており(国立特別支援教育総合研究所 2012, p.33)、すべての学校教育においてインクルーシブ教育を行うことになっている。筆者はこれまでにイタリアのA中学校を視察し、中学校音楽科授業の中でも、合唱や器楽演奏などの活動を扱うインクルーシブ授業の場面を捉えてきた⁴⁾。しかし、日本が抱える問題として、高校入試のための学力保障の観点から、特別なニーズをもつ子どもたちが排除されているという現状を鑑みれば、音楽科の学習の中でも、より認知的側面を扱う場面でのインクルーシブ授業を捉える必要がある。その1つの方法として、音楽科授業を実践する手立てとなる中学校音楽科教科書に着目する。

本稿では、インクルーシブ授業の実現という観点から、インクルーシブ教育を実現しているイタリアの中学校音楽科教科書を分析・考察し、その特徴を捉えることを目的とする。また日本のインクルーシブ授業の実現に向けて得られた示唆を提示する。

2. インクルーシブ授業の視点と方向性

インクルーシブ授業の視点として、酒匂 (2020) は「インクルーシブ授業の創出には、子どもたちの学習への『参加』が保障されること、そしてそれぞれの『差異(多様性)』に着目することが重要である」(p.65)

とした。「参加」については「学びの当事者である子どもたち自身が自分たちにとって必要な学びとその方法を共に考えていく過程」が重要であり、「その過程を通して、対等な立場での『参加』が保障される」(p.66)とし、「差異」については「能力の差に応じた配慮や工夫を行うことは当然のことながら、子どもたちの学習への参加のあり方、既存の指導法や学習内容を問い直す視点が求められている」(pp.66-67)と述べている。ここでは、インクルーシブ授業を実現するためには、学びの当事者である子どもたちを学びの主体とし、指導者側の意識や指導の見直しが必要であると指摘している。「差異」のある多様な子どもたちが「参加」するとは、その場に存在するという状態ではなく、学ぶ方法をも自分たちで選択し、考えている状態なのである。

また中学校におけるインクルーシブ授業の方向性として、新井(2018)は「教材(単元)や学習課題といった『大まかなテーマ』は存在するが、そのテーマの中でどのように参加し、どう表現するかについては『決まった形式』があるわけではないということが見えてくる。むしろ、それまでの自分が思い描いていたこととは異なる『出来事(矛盾や衝撃的事実)』に偶然直面し、たまたま関心をもった課題と生徒が接続し、新たな連接(意味世界)を形成することができるように授業を展開することが重要であった」(p.153)と述べている。ここで述べられているのは、学びの主体である子どもたち自身が関心を抱いたものから新たな意味世界を作りだしていくこと、つまり学び方そのものを子どもたちが選択・創造していくことの重要性である。

こうしたことから、子どもたちを学びの主体とすること、子どもたちの関心にしたがって子どもたち自身が学ぶ方法を選択・創造すること、子どもたちが新たな意味世界を形成するための情報を準備しておくことが、インクルーシブ授業の実現に必要なことであるといえよう。

3. 教科書 *fantasia e musica* (2017) の分析

3-1. 教科書 *fantasia e musica* の概要

イタリアでは教科書は、価格の規定はあるものの内容についての検定はないため、様々な出版社が独自の教科書を出版している。その中でも、*fantasia e musica* (以下、「本教科書」)は、「*Insieme è facile*」(訳：一緒にすること、それは簡単なこと、以下「インクルーシブ部分」)というページが教科書の所々に挿入されており、それまでの内容を簡単にまとめている。また、文字のフォントが通常の部分と変更されており、小文字の「l(エル)」と大文字の「I」や小文字の「b」と「d」の違いがわかりやすいようになっている。文字の大きさや行間も通常より大きい。またインクルーシブ部分に書かれてある文章は、別売りのデジタルブックにより読み上げが可能であり、それを聴くことができる。以上のことから、特にインクルーシブ教育の視点をもっている教科書(内容についての詳細は後述)であるとして選定した。

本教科書はABCの3冊で1組となっており、Aは器楽演奏メソッド(全228ページ)、Bは民族音楽と演奏のための曲集(全253ページ)、Cは楽器と音楽の形式と音楽史(全362ページ)について掲載されている。イタリアの中学校は3年制で、3年間を通して週1時間程度の授業が規定されているが、教科書には特に学習する学年の指定はない。また、この3冊と共にDVD-ROMが3枚付属している。

それぞれの教科書に含まれている単元を表1に示す。また表1の下線の単元では、インクルーシブ部分を含んでいる。

表1 本教科書の単元

A 器楽演奏メソッド 単元1: 音の世界へ入ろう 単元2: 演奏を始めよう 単元3: メソッドを使った演奏
B 民族音楽と演奏のための曲集 単元1: 世界の音楽 単元2: 知ること、演奏すること、歌うこと: 私の時代の音楽 単元3: イベントやプロジェクト
C 楽器と音楽の形式と音楽史 1. 楽器と音楽の形式 単元1: <u>オーケストラの楽器</u> 単元2: <u>音楽の形式と声</u> 2. 音楽とその形 単元3: <u>基本構造</u> 単元4: <u>厳格な形式</u> 単元5: <u>可変構造</u> 3. 音楽史 単元6: <u>古代と中世の音楽</u> 単元7: <u>ルネサンスの音楽</u> 単元8: <u>バロックの音楽</u> 単元9: <u>新古典の音楽</u> 単元10: <u>ロマン派の音楽</u> 単元11: <u>国民学派</u> 単元12: <u>20世紀に向けて</u> 単元13: <u>20世紀の音楽</u>

3-2. インクルーシブ部分

3-2-1. 器楽演奏メソッド（本教科書のA-単元2）

通常部分，インクルーシブ部分どちらも，器楽演奏メソッドの単元で主に使用する楽器は，ソプラノリコーダー，キーボード，ギターで，基本的には3つの楽器とも楽譜に示された旋律を演奏する流れになっている。小单元ごとに1音ずつ演奏できる音が増えていき，通常部分では新出の音を含めた楽曲の楽譜が複数掲載されている。楽譜には，必ず難易度が示されているほか，キーボードを演奏する際の運指番号や，ギターで和音を演奏する場合のコードがついている。ここで掲載されている楽譜については，演奏部分を視覚的に理解するための「動く楽譜」がDVDに収録されている。

ここでは例として，Re3 (D4) を新出音とする小单元を示しながら，インクルーシブ部分の特徴をみる。図1は，Re3 (D4) を新出音とする単元のインクルーシブ部分である。まず，演奏する前に楽譜の観察からスタートする。ここでは，Solが何回出現するのかなど，音符の色を頼りにゲーム感覚で楽譜の観察をさせている。そして打楽器のライン（楽譜）があることを示している。曲名の下に，この曲で使用する音の数や変音の有無を示し，さらに難易度が示されている。

楽譜を見ると，音符にそれぞれ色が付けられており，この色は教科書全体で統一されている。曲数はインクルーシブ部分ではこの1曲のみだが，通常部分では5曲準備されている。小節数は通常部分はこの小单元の最大が81小節だが，インクルーシブ部分では16小節になっている。使用される音符の種類は，ここでは2分音符，4分音符（休符）のみだが，この小单元の通常部分では，さらに全音符（休符），付点2分音符，付点4分音符，8分音符（休符）が使われている。

新しいRe3の音は，有名なSUPERCALIFRAGILISTICのメロディーに1回だけ登場します。音符の色を頼りに，Solが何回出現するのか，また他に1回だけ出現する2つの音は何かを調べます。五線譜の下には，打楽器のラインがあり，タンバリン，トライアングルなど，選択した楽器で簡単なリズムを叩きます。8つの音（Re3～Re4）で構築されたメロディーは，リコーダーやキーボードの両方で非常に簡単に演奏できます。

SUPERCALIFRAGILISTIC

Re3を伴った8つの音，変音なし・簡単

Allegro

Flauto
o Tastiera
Re3-Re4

キーボード：10小節の運指に注意してください。同じSolの音ですが指を変えて演奏しなければなりません。

リコーダー：Re3の音は左手（赤の穴）の4つの指を使いながら，右手（青の穴）の3つの指を使います。



図1 器楽演奏メソッドのインクルーシブ部分
（本教科書のAのp.67より筆者作成）

楽譜の右には、キーボードやリコーダーで演奏する際に注意する点が表示されている。通常部分においても示されているが、インクルーシブ部分では、例えば「赤の穴」などというように色を使いながら説明していることが特徴的である。

楽譜の下には、使用できる打楽器が写真付きで紹介されている。また、キーボードにおける鍵盤の音の位置やリコーダーでの運指も、統一された色を使って示されている。

3-2-2. オーケストラの楽器（本教科書のC-1-単元2）

「オーケストラの楽器」の学習では、通常部分では木管楽器、金管楽器、擦弦楽器、撥弦楽器、鍵盤楽器、打楽器のそれぞれについて、オーケストラで使用されている楽器を中心に1つずつ紹介している。楽器の構造、大きさ、材質、音域、特徴的な楽曲、演奏方法などについて、文章だけでなく、写真や図を使って丁寧に説明されている。インクルーシブ部分では、木管楽器で1つ、金管楽器で1つというように、各楽器群の中から1つずつ楽器が取り上げられている。

ここでは例として、金管楽器のインクルーシブ部分を示しながら、その特徴をみる（図2）。図2のように、金管楽器群からはトランペットが紹介されている。

楽器の特徴やその起源などは、通常部分で掲載されている内容を少し簡潔にしたものであり、大きな違いはない。しかし、インクルーシブ部分には、楽器の部位の名称の下に「答えよう」という記述があるこ

管楽器：金管楽器

管楽器の2番目のグループは金属のグループで、それらはマウスピースをもつ楽器です。唇をつけて息を入れるためにマウスピースがあります。息を入れている時の唇の振動は、管の中の空気に伝達され、ベルから音として出てきます。

トランペット

トランペットには古代に起源があります。エジプト人とローマ人は、狩猟中や警告シグナルのために、トランペットを軍隊の道具として使用していました。17世紀から、トランペットは音楽（特に室内楽）に使用され始めます。19世紀になると、トランペットの形は完成し、今日私たちが知っているような形になります。金属できており、長さは約46センチです。トランペットの最も重要な部分は次のとおりです。

答えよう

- ・トランペットは何の仲間ですか？
- ・古代エジプト人とローマ人はどのようにトランペットを使用しましたか？
- ・現在の形になったのはいつですか？
- ・どのような材料で作られていますか？
- ・ピストンとは何ですか？

図2 オーケストラの楽器のインクルーシブ部分

(本教科書のCのp.59より筆者作成)

とが特徴的である。ここでは5つの質問がなされている。トランペットの歴史や材質、部位の役割など、答えは全てそのページに書かれている。この質問があることにより、トランペットという楽器を学ぶ中でポイントとなることを容易に理解することができる。

なお通常部分のトランペットのページでは、これに加えて P. I. チャイコフスキーの「イタリア奇想曲」を参考音源として紹介しており、この曲は教師用の CD に収録されている。しかし教科書には曲名以外、曲についての説明や、鑑賞の視点などは何も記されていない。

3-2-3. 音楽とその形（本教科書の C-2）

ここでは例として、オーケストラについてのインクルーシブ部分を示す（図3）。オーケストラの種類について、通常部分ではバロック・オーケストラから現代のシンフォニックオーケストラまで1つずつについて構成図と共に説明されており、それぞれの参考音源も示されているが、インクルーシブ部分では、現代のシンフォニックオーケストラのみ、構成図が示されている。また、打楽器がなぜ一番後ろに配置されているのか、などといった説明は、通常部分にも掲載されているが、インクルーシブ部分では、図の打楽器部分を指しながら説明がなされていることが特徴である。

オーケストラとその他の器楽の形態

現代のシンフォニックオーケストラ

初めのオーケストラはヨーロッパで1600年代初めに誕生し、その弦楽器で構成されていました。何世紀にもわたって他の楽器が追加され、現代のシンフォニックオーケストラが形成されました。オーケストラの演奏家は演奏中は指揮者に率いられます。

バロック・オーケストラ 古典派オーケストラ ロマン派オーケストラ 現代のシンフォニックオーケストラ

次に示すのは、現代のシンフォニックオーケストラの構成です。

打楽器は、一番後ろの高い位置に配置されます。なぜなら、自由に動けるスペースが必要だからです。

最もたくさんいるのは弦楽器です。（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）

管楽器は、中央でアーチ型で列に分かれています。

他の器楽の形態

オーケストラの他に、たくさんの形態があります。

- －室内楽は、少しの楽器のグループです。最も重要なのはカルテットで、4つの楽器で構成されています。2つのヴァイオリン、1つのヴィオラ、1つのチェロです。
- －ジャズは、黒人アメリカ人の中で1900年代に誕生しました。より大きいのはビッグバンドで、トランペット、トロンボーン、サクソ、そして、ときにはギター、ピアノ、コントラバスやドラムで構成されます。
- －1950～1960年に誕生したのがロックです。少なくとも5名の音楽家で構成され、電子楽器を使用します。楽器で最も重要なのは、エレキギターです。
- －パンダは古代に起源をもちますが、その形態は1800年代はじめに決定的になりました。管楽器と打楽器で構成されます。

図3 音楽の形式のインクルーシブ部分

（本教科書のCのp.96より筆者作成）

その他の器楽の形態についても、オーケストラの種類と同様に、通常部分で1つずつ詳細に説明されていたのに対し、インクルーシブ部分では大幅に省略され、文章のみとなっている。イラストや写真が全くなく、通常部分よりもわかりづらくなっている。

この小単元のポイントは、現代のシンフォニックオーケストラの構成を理解させることであるといえる。

3-2-4. 音楽史（本教科書の C-3）

音楽史の単元は他と異なり、まず単元の初めに、図4のようにインクルーシブ部分が掲載され、単元の最後に、他と同様に、通常部分を簡潔にまとめたインクルーシブ部分が掲載されている（図5）。

単元の初めに示されている図4のインクルーシブ部分は、通常部分をまとめたものではなく、ロマン派の音楽の学習に入る前に、ロマン派の参考音源を1つ鑑賞し、そこからその時代の音楽の特徴などを感じ取る流れとなっている。これは、バロック音楽や古典派音楽の単元など、音楽史のすべての単元において、このように時代の雰囲気を感じ取るインクルーシブ部分のページからスタートし、図4のようにその時代の特徴を感じられる曲の鑑賞と、その曲に関連して「音楽と映像」「音楽と言葉」「音楽から背景へ」「想像しよう」というタイトルで活動できる流れになっている。

単元10 ロマン派の音楽

参考CD音源
フレデリック・ショパン
練習曲Op.10-12
「革命」と呼ばれる

始める前に

ポーランドの作曲家、**フレデリック・ショパン**のこの曲を初めて聴いてみてください。慌ただしく鳴り響く音を忠実に再現するには、どの程度の速さで指を動かせばよいかを（右手で）シミュレーションしながら聴いてみてください。

音楽と映像

もう一度、その曲を聴いて、自分の**気持ち**に集中してください。そして、次の画像のうち、どれが自分たちをよく表しているか、その理由を説明しなさい。








音楽と言葉

作曲者はどのような感情を伝えたかったのでしょうか？また、その理由を説明してください。

愛 繊細さ 憎しみ 情熱 平穏
失望 強さ 反抗 活力 調和

どのような文章のときに、この曲をサウンドトラックとして選びますか？（複数回答可）。その理由を説明してください。

ラブレター 宣戦布告 国への賛美 説明文

音楽から背景へ

19世紀は、ヨーロッパに革命の風が吹き荒れた「感情と反抗の世紀」でした。1815年の**ウィーン会議**で、旧来の絶対王政が復活し、**フランス革命**で勝ち得た自由が取り消されたことへの反動でした。多くの民族が他の国家に分割され、支配されました。音楽家もまた、自由を求め、外国の抑圧者に対抗するメッセージを広める手助けをしたいと願ったのです。例えば、この曲は**ショパン**が1831年に作曲したもので、「**11月蜂起**」の直後でした。音楽を通して、抑圧する者たちに、文字通り音符で「機銃掃射」するのです。

想像しよう

あなたが**フレデリック・ショパン**であると想像してください。今あなたは、ポーランドの自由を奪ったロシア人へのメッセージを書くチャンスを得ました。あなたなら、どんなことを言いますか？聴いた曲を通して作曲家が何を表現したかったのか、自分の言葉で表現してみましょう。

図4 音楽史のインクルーシブ部分（単元はじめ）
（本教科書のCのpp.248-249より筆者作成）

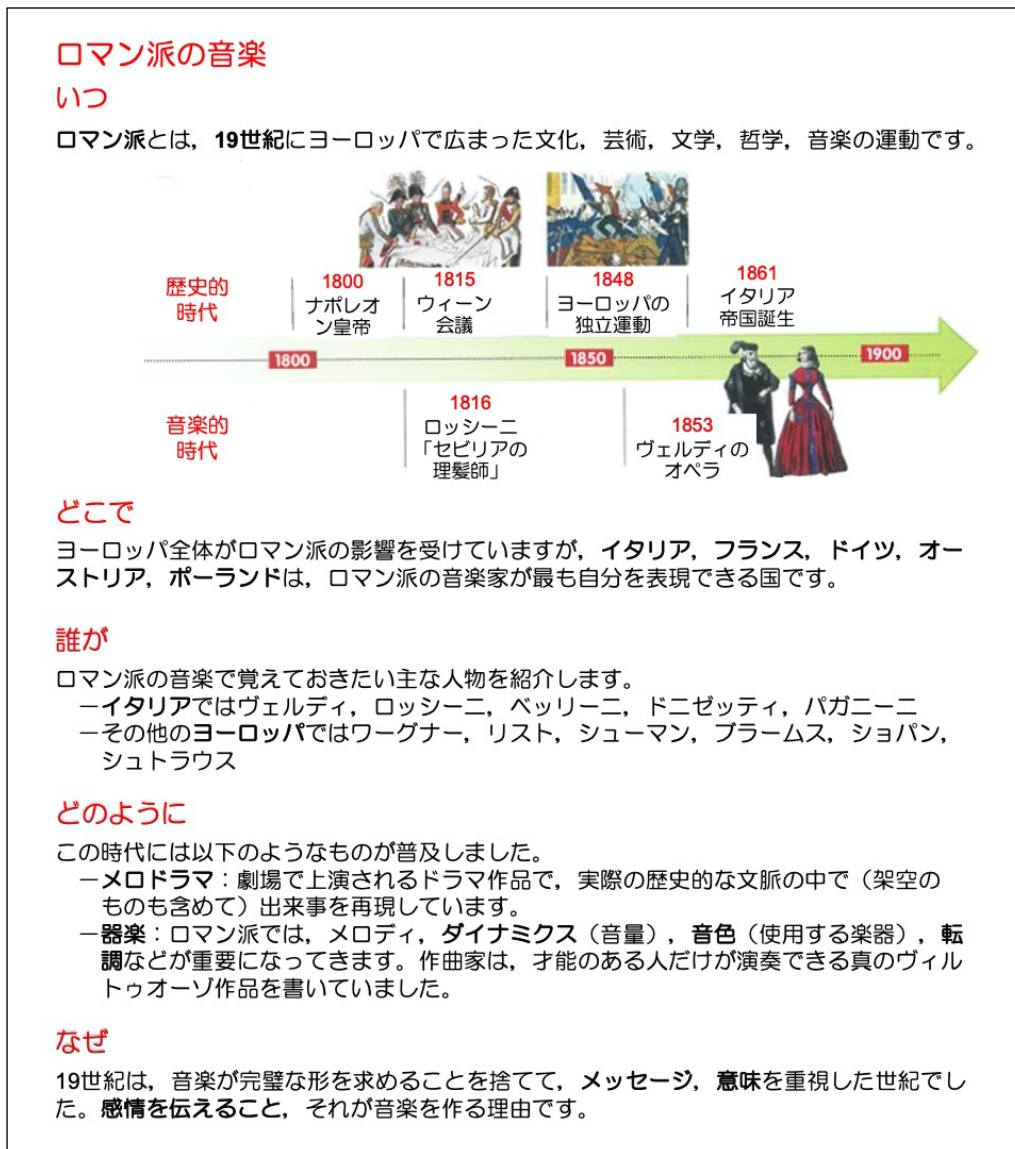


図5 音楽史のインクルーシブ部分（単元まとめ）
 （本教科書のCのp.274より筆者作成）

図5のインクルーシブ部分では、通常部分の詳細な内容を簡潔にまとめたものとなっている。ロマン派時代の音楽的な出来事と歴史的な出来事を、並べて見ることができる図が示されており、これにより音楽の歴史的背景に迫ることができる。また、「いつ」「どこで」「誰が」「どのように」「なぜ」という5つの点に絞ってロマン派の音楽が説明されている。他の単元でのインクルーシブ部分もこの5つの点に絞って説明されている。

3-2-5. インクルーシブ部分の特徴

まず、各単元に掲載されているインクルーシブ部分は、ユニバーサルデザインの視点から工夫がなされていた。文字のフォントの変更や、デジタルブックによる教科書の文章の読み上げ、音符の色分け、焦点化された内容など、特別なニーズをもつ子どもたちが取り組みやすいような工夫がなされている。しかしながら、これらの配慮自体は、特別なニーズをもつ子どもたちが通常教育の学びに追いつくための手立てとも考えられ、特別なニーズをもたない子どもたちにとっての学びにはなっていない。

3-3. 通常部分のインクルーシブの視点

本教科書では、インクルーシブ部分以外にも、通常部分においてユニバーサルデザインの視点を備えて

いる。まず全体的には、インクルーシブ部分は文字のフォントが見やすいものに変更されているが、通常部分においてもデジタルブックにより、フォントの変更が可能となっている。また、例えばリコーダー二重奏の楽譜では上のパートと下のパートの楽譜の背景の色を黄色と青で分けていたり、長い文章でも重要な語句が太字になっていたりして、視覚的な補助がなされている。

こうしたユニバーサルデザインの視点とは別に、生徒が主体的に選択して学んでいける手立てが本教科書には見られる。例えば、前述のとおり、器楽演奏メソッドについては、全ての練習曲について、難易度が示されているほか、DVDに伴奏音源（旋律付き、旋律なしの両方）や動く楽譜が準備されている。さらに練習曲の楽譜の説明部分においては、その曲で使用される拍子、音符の種類、音の数と種類と、使用される音の運指やキーボードの位置が示されており、楽譜を観察することなく、自分のレベルに合わせた曲を選択することができる。また音楽史の単元では、前述のとおり、インクルーシブ部分からスタートし、その時代の音楽の雰囲気を簡単に捉えたいうえで学習に入り、その後は時代的背景、音楽的に重要な出来事、その時代のイタリアとその他の国の音楽、特徴的な楽器・作曲家・音楽の形式、重要な曲などがそれぞれおおよそ見開き1ページずつ使って掲載されている。あらゆる側面から詳細にその時代の音楽を説明しているが、週1時間の音楽の授業だけで、これらの全ての内容を網羅することは考え難い。とすれば、授業の流れによって使用するページを選択することができるのではないだろうか。

4. 考察

4-1. インクルーシブ授業の実現という視点からみたイタリアの中学校音楽科教科書

インクルーシブ授業の実現という視点から、本教科書を分析・考察したところ、3点の特徴を捉えることができた。

1点目は、ユニバーサルデザインの視点から教科書が作られていることである。永田（2016）が主張するように、ユニバーサルデザインは、通常教育に追いつくための支援になる恐れがあるが、他方、より抽象化される中学校での授業においては、教材や教育内容へのアクセシビリティの向上は必要不可欠である。例えば本教科書の中には、「想像してみよう」などといった活動が多く含まれている。そうした活動では、1人で考えるだけでなく、クラスやグループでの意見交換が想定される。その際に必要な情報をあらゆる生徒が得るためには、やはりユニバーサルデザインの視点からの支援が必要である。重要なことは、その目的が通常教育への同化にとどまらないことであろう。

2点目は、生徒による選択の幅が広いことである。これは例えば、器楽演奏メソッドの単元で見られた。1つの新出音につき、約5曲の練習曲が準備されており、それらにはあらかじめ、難易度や使用する音、音符の種類などが提示されていた。こうした情報により、生徒は自分の実力に合った曲を自分で選択することができる。生徒は自分自身の能力を知り、能力の向上のためのプロセスを探り、能力を育てることができる。さらには、自分だけでなく、教室にいる多様な他者がそれぞれの能力をもち、「できる」こと、「できない」ことがあると知り、他者がそれぞれの学習プロセスを探っていることに気づく。永田（2018, p.141）は「できない」自己を自身や他者と共に認識するプロセスすらもエンパワメントになると述べており、本教科書のこうした工夫により、生徒にとってのエンパワメントにつながっていく可能性があるだろう。

3点目は、生徒の関心に合わせた授業の展開が可能になることである。例えば音楽史の単元では、ある時代について歴史的背景、特徴的な作曲家など複数の視点から詳細な説明がされており、その1つ1つに関係する参考音源が提示されている。おそらく授業時間数の関係から全てを扱うことはできないと想像されるが、その時代のどの部分に生徒が興味をもったのか、というところから授業を展開することが可能となる。新井（2018, p.153）はインクルーシブ授業の方向性として、教材（単元）や学習課題といった「大まかなテーマ」の中で「決まった形式」はなく、たまたま関心を持った課題と生徒が接続し、新たな意味世界を形成できるように授業を展開することが重要であると述べている。本教科書は、例えば「ロマン派の音楽」という大まかなテーマは存在するが、その時代の音楽をどのように捉えていくかということとは決められておらず、むしろ多様な捉え方が準備されているところに、インクルーシブ授業のための要素を見いだすことができる。そして高校入試に向けた学力保障のための授業ではパワーレス状態となる生徒をも、「大まかなテーマ」の中で学ぶことが焦点化されていない状況下では、再包摂できる可能性がある。

さらに湯浅（2005）が述べているように、オーナーシップを与えられた多様な生徒たちの関わりの中で、あらゆる生徒が、自身の学びや生活、また自分にとってのニーズとは何か、などを問い返す機会となり、生活で生きて働く力は養われていくだろう。

4-2. 日本のインクルーシブ授業の実現に向けた示唆

教科書の構成という点から見ると、本教科書の総ページ数は843ページであり、日本の教科書のような学ぶ内容が焦点化されたスマートなものと比較すると、かなりの分量である。ただしそこには、生徒の興味、関心に合わせた多様な学び方、学ぶ内容の選択肢があるといえる。生徒に学ぶことへのオーナーシップを与え、学ぶプロセスの中で一緒に存在する多様な他者の存在を認識していくといった考え方は、インクルーシブ授業の実現のために必要なことである。

注

- 1) 永田（2018,p.131）も、中学校を対象としたインクルーシブ教育の先行研究が小学校に比べて少ないのが現状であると指摘している。
- 2) カタカナ表記について先行研究では「エンパワーメント」「エンパワメント」のどちらも使用されているが、本稿では読みを重視し「エンパワメント」を用いる。これについては中村（2004）を参照した。
- 3) 学校教育における「エンパワメント」の意味として、スペンサー&ジュリアーニ（2020）では「人間のもつ本来の能力を最大限にまで引き出すこと」、富尾・橋本（2018）では「生徒一人一人が個々の生活に対し意思決定をし、制御できるようになる、またはできていると感ぜられるようになること」、本村（2018）は体育授業の文脈から「自分の内なる運動に対する存在に気付き、そのパワーを生涯にわたって豊かに育てること」とされている。
- 4) 大野内愛（2020）「イタリアの公立中学校音楽コースにおけるインクルーシブ教育の実践－A 中学校の視察を中心に－」『教育学研究紀要』66巻，1号，pp.340-344

引用・参考文献

- 新井英靖（2018）「中学校におけるインクルーシブ授業と教科学習の意義－情緒不安定な中学生に対する強化学習の指導から－」湯浅恭平・新井英靖『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版，pp.145-156
- 今井理恵（2018）「インクルーシブ授業における子どもの参加・共同に関する教育方法学的検討」湯浅恭平・新井英靖『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版，pp.76-86
- 久木田純・渡辺文夫（1998）「エンパワーメント：人間尊重社会の新しいパラダイム」『現代のエスプリ』No.376，至文堂，pp.5-9
- 国立特別支援教育総合研究所（2012）「諸外国における障がいのある子どもの教育」『国立特別支援教育総合研究所ジャーナル』創刊号，pp.30-42
- 酒匂まどか（2020）「インクルーシブ授業をつくり出す視点－「すべての子どもたち」という言葉に着目して－」『鳴門教育大学国際教育協力研究』第14号，pp.61-68
- スペンサー，J. &ジュリアーニ，A. J. [吉田新一郎 訳]（2020）『あなたの授業が子どもと世界を変える－エンパワーメントの力－』新評論
- 富尾拓・橋本忠和（2018）「地域を題材とした美術科の授業が生徒のエンパワーメントに及ぼす効果についての一考察－AASLの21世紀を生きる学習者のための活動基準を活用して－」『北海道教育大学紀要 教育科学編』68巻，2号，pp.547-561
- 永田麻詠（2016）「インクルーシブな国語科授業に関する一考察－中学校国語科を中心に－」『四天王寺大学紀要』62巻，pp.175-185
- 永田麻詠（2018）「中学校の学力形成と授業づくりの困難さ」湯浅恭平・新井英靖『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版，pp.129-144
- 中村和彦（2004）「エンパワメントの概念およびエンパワメント・ファシリテーションの検討」『人間関係研究』3巻，pp.1-22

- 本村祥次（2018）「授業を通して生徒をどう育むかーエンパワーメントを支援するためにはー」『佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要』2巻, pp.335-336
- 湯浅恭平（2005）「インクルージョン教育の教育方法学的検討」日本教育方法学会編『教育方法 34 現代の教育課程改革と授業論の探究』図書文化, pp.110-124
- 湯浅恭平（2015）「インクルーシブ授業の理論で問われるもの」インクルーシブ授業研究会編『インクルーシブ授業をつくるーすべての子どもが豊かに学ぶ授業の方法』ミネルヴァ書房, pp.3-14
- 湯浅恭平（2018）「日本におけるインクルーシブ教育をめぐる研究動向と論点」湯浅恭平・新井英靖『インクルーシブ授業の国際比較研究』福村出版, pp.28-41
- Castello, R. P. (2017) *fantasia e musica*. Minerva scuola.